



《流水 手取川》1959年

宮本三郎
水辺をめぐって2026
4/1_(水)
—
9/6_(日)

◆ 基本情報

- 展覧会名 宮本三郎 水辺をめぐって
- 会 期 2026年4月1日[水]～9月6日[日]
- 会 場 世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館
〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 5-38-13 TEL:03-5483-3836
<http://www.miyamotosaburo-annex.jp/>
- 主 催 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷美術館
- 開館時間 10:00～18:00 (入館は17:30まで)
- 休 館 日 毎週月曜日 (ただし、祝・休日と重なった場合は開館、翌平日休館)
5月4日(月・祝)、7月20日(月・祝)は開館、5月7日(木)、7月21日(火)は休館
- 観 覧 料 一般220円(180円)、大高生170円(130円)、65歳以上/中小生110円(90円)
※()内は20名以上の団体料金
※障害者の方は110円(90円)、ただし小・中・高・大学生の障害者は無料。
介助者(当該障害者1名につき1名)は無料。証明書をご提示のうえ、お申し出ください。
※世田谷区内在住・在校の小・中学生は土日、祝・休日、夏休み期間は無料
※受付で生活保護受給証明書をご提示頂いた方は無料

◆ 展覧会概要

洋画家・宮本三郎（1905-1974）は、水辺の風景に囲まれて育ちました。宮本の故郷は石川県小松市の日本海沿岸部にあたり、当時の地域一帯には「加賀三湖」と呼ばれる潟湖が点在していました。彼は後年、故郷の潟の風景を、早朝や夕方と思われる幻想的な光のもとに描いています。

2度にわたる滞欧時には、フランスの風景画の定番モチーフであったエトルタの海岸や、印象派以降の画家が好んで描いた河岸なども題材にしています。ヨーロッパ各地で感受した豊かな色彩は、1960年代後半の明るく軽やかな海浜風景にも通じているようです。

絵画上の実験にも、水の存在は欠かせません。幾層にも絵の具を塗りこめることで川の逆巻く水面を表現した〈流水〉のシリーズや、人の姿を映す水鏡を画中に描きこんだ作例など、随所で水が効果的に取り入れられています。

本展では「水」をキーワードに、水辺を題材とした作品、さらに水の反映を活かした作品を紹介します。宮本が描いた水辺をめぐりながら、その創造の源流にふれてみてはいかがでしょうか。

□各画像は広報用として提供しております。ご希望の際は広報担当までお問合せください。

TEL:03-5483-3836 E-mail:miyamoto.annex@samuseum.gr.jp



1 《水》1960年



3 《題不詳（海水浴）》1971年頃



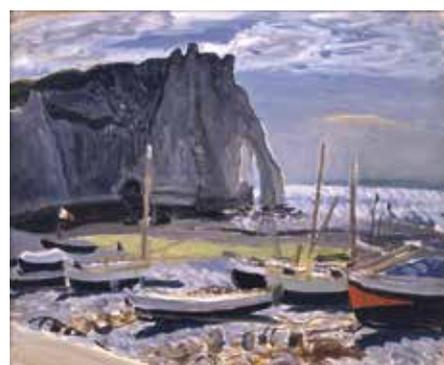
5 《生》1974年



2 《飢渴》1943年



4 《題不詳（潟の風景 小松）》1945-48年



6 《エトルタの海》1939年



7 《流水 手取川》1959年

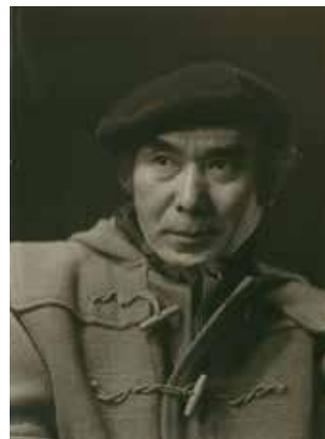
◆ 宮本三郎記念美術館

◆ 宮本三郎について

宮本三郎(みやもと・さぶろう)は、1905年5月23日に現在の石川県小松市松崎町に生まれ、1935年7月より世田谷区奥沢にアトリエを構えた、昭和を代表する世田谷区ゆかりの洋画家です。

川端画学校で富永勝重、藤島武二、また個人的には安井曾太郎に指導を受け、戦前は二科展を中心に発表を行いながら、雑誌の挿絵や表紙絵の制作でも活躍。戦時中は従軍画家として藤田嗣治、小磯良平らとともにマレー半島、タイ、シンガポールなどに渡り《山下、パーシバル両司令官会見図》(1942年)をはじめ、数々の作戦記録画を制作しました。戦後は、熊谷守一、田村孝之介らと第二紀会を設立。生来の素描力を土台に、さまざまに画風を変えながらも、人物を主たるテーマとして制作、晩年は花と裸婦を主題にした豪華絢爛な絵画世界を構築します。

1974年10月13日、腸閉塞による心臓衰弱のため、69歳で他界。



撮影 藤原正 (撮影年不詳)

◆ 会期中のイベント

ワークショップ、ギャラリートークなどのイベントは決定次第、宮本三郎記念美術館HP,SNSにてお知らせいたします。



参考：2025年8月9日～11日開催

「サマー・ワークショップ2025 あなたの椅子をつくろう！」

◆ 公式Instagram (宮本三郎記念美術館、ミュージアムショップ)



◆ お問い合わせ先

宮本三郎記念美術館 (広報担当)

Email : miyamoto.annex@samuseum.gr.jp

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢5-38-13

TEL : 03-5483-3836